

# HIMALAYA

**ヒマラヤ**  
**No. 125**



**1982 APR.**



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

**日本ヒマラヤ協会**

# 1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン (7,135m)

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとりた確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行っており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実践している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- 1977年 タルコット (6,099m)  
(JACに協賛して行なった)
- 1978年 ヌン (7,135m) 4名登頂  
トリスルI峰 (7,120m) 6名登頂  
II峰 (6,690m) 7名登頂
- 1979年 キャシードラル (6,400m) 6,000mまで

- 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831m) 19名登頂
- 1981年 ナンダ・カート (6,611m) 事故のため断念
- 1982年 クン (7,077m) 現在準備活動中

## 実施要項

- 目的 ①ヌン (7,135m) 登頂  
②高所登山の基礎修得
- 時期 1983年7月末～8月末 (35日間)
- 負担金 71万円 (航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員 20名  
インストラクター4名 (医師含む)
- 申込み 1982年6月末までに下記宛に申込みと (資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申し込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

## 表紙写真

ククアール氷河源頭のテイルマンのCOL (5,791m) に立つと長大なバツール氷河を挟んでククサール (6,935m) の全容が望まれた。

内田 勲

# ヒマラヤ No.125

1. ヒマラヤ放談 \_\_\_\_\_ 土屋 守
5. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉
8. ドルジェ・ラクパ初登頂 \_\_\_\_\_ 法政大学Ⅱ部 山岳部隊
13. 第二次カンチエンジュンガ学術遠征報告 \_\_\_\_\_ 五百沢 智也
15. 連載 未踏への誘い (1) \_\_\_\_\_ 杉本 忠男  
ヒマラヤ閑話 ⑩ \_\_\_\_\_ 水野 勉  
ヒマラヤの報告書紹介 ⑪ \_\_\_\_\_
24. 事務局日誌・寸感

# ヒマラヤ放談

ここにチベットに魅せられ、ラダック、ザンスカールに通い続けている男がいる。土屋守氏。学習院大探検部OB。1975年に訪れて以来、滞在日数は延べ一年になる。「天真爛漫、かつ男としての魅力あふれる遊牧民気質にひかれて。」と語る土屋さんも、どこか大陸的な風格の持主だ。

乾燥冷涼の地に生きる人々の暮らしを見つめる目は、同時に日本と氏自身を見つめる目であったようだ。現在、雑誌「フォーカス」編集部勤務。ラダック研究会、地平線会議の世話人でもある。



## 土屋 守

### 「ヨカン」冬籠りの部屋

——土屋さんは1975年以来、ラダックに通い続けていらっしゃるのですが、今回はラダック・ザンスカールの生活、風習についてお話を伺いたいと思っています。まず、1976年の、学習院大探検部の遠征についてお聞きしたいのですが。

土屋 この時はザンスカールのトゥングリという村に住み込んで一ヶ月調査をやった訳です。この時の目的は広範囲にわたってまして、僕らのやれる文化人類学といってもたかが知れている訳で、出発前に色んな人からアドバイスを受け、住居調査をやりました。

——家の大きさとか測るんですか？

土屋 ええ、家の大きさとか間取り、部屋の名称、それからどういう順序で建てられるのか、どういう意味を持つのかなど、かなり詳しくやりました。その結果、一番古い住居形式を残しているのがザンスカールであると僕は思っているのですが。

——はあ、古い？例えば。

土屋 特徴的なものに「ヨカン」があることです。

——「ヨカン」？ヨカンとはどういう事ですか？

土屋 「カン」とは部屋のことで、「ヨ」は下という意味で、「下の部屋」という意味しかないんですが、普通、住居は二階建てで、二階は全部

居室とか食料貯蔵庫となっている訳です。で、一階は全部、家畜の部屋になっていますね。ところが、一階の一番の奥に「ヨカン」という部屋があるのです。その部屋は何かというと、夏は使わない。冬の本当に寒い一月二月の約1ヶ月半から2ヶ月、この「ヨカン」で冬籠りするんです。

——人間がですか？

土屋 人間がです。冬眠するんですよ。

——ハア、冬眠！ヨカンと言うよりもアオカンという感じですか。（笑）本当に冬眠するんですか？

土屋 ま、冬眠はオーバーですけど、「ヨカン」で全部生活するんです。

——大きさはどれ位ですか？日本の畳で言えば。

土屋 家によって違うけど6~8畳位ですか。

——これはザンスカールのどこにもありますか。

土屋 ありますね。ただ、現在「ヨカン」で生活することが段々なくなりつつあるんです。

——これは一階でしょう？一階だと地面に近いから余計寒いんじゃないかって気がするけど。

土屋 いやかえって暖いです。半地下になってますし、それにヨカンの回りを全部家畜部屋が囲んでるんです。入って驚いたんだけど、中は熱気がワァーなんです。家畜の体温で守られている。それで、ヨカンのかまどのすぐ隣りの部屋には、

その年生まれた小羊とか小山羊とか入れてあるんです。一階の部屋は割と迷路みたいになっていて、家の入口から一番遠い所にヨカンの入口があって外気が入り込まないようにしてるんですよ。——これは初めて聞いたな。それから1979年に入られてますね。

## 失われた王国—ザンラ

土屋 この年はザンラという村を目ざしたんです。というのは、'76年のトゥングリの調査で語れることが全てのザンスカールの村にあてはまるかと言うと疑問がありまして、もっと村として奥まった所にある村はないかという考えがありました。——あのあたりで一番大きいのはパダムです。パダムでなくザンラを選んだ理由は。

土屋 パダムはイスラムがかなり入ってます。もともとザンスカールの王朝はパダムにありましたけど今は完璧になくなってます。で、ザンスカール王朝は15Cか16Cに二つに分れ、その一つがパダム王朝でもう一つがザンラ王朝です。パダムの方は潰滅したけれどザンラの方はまだに続いているのです。「ザンラ王朝」というのはフランクヤミッシェルバイセルの文献にも出てきますし、ザンスカールの中では特異な村です。わずか30年前までは王朝があった訳でかなり由緒正しい王家であることは間違いないのです。

——そのザンラで何か発見がありましたか。

土屋 ザンラの、320人の家を調べ父系社会というのですか、父方の集団がかなり強い結びつきを持っていることがわかりました。

——チベットは女性の方が強いと思っていましたか。

土屋 いや女は強いですよ。もちろん。しかし、家系的には父方からの継承をしている。あの、川喜田二郎さん達がネパールのトルボに「骨と肉の概念」があることを言ってます。つまり、父方からは骨を継承し、母方からは肉を継承するという、一つの「骨を同じくする集団」の結びつきが強く、この集団はザンラで11グループに分かれ、それぞれが「バスブン」を持っているということがわかったのです。

——一人一人が「バスブン」というものを持っ

ている？あの、インディアン守護霊みたいなものですか。イニシエーションで出会う動物の霊とか。

土屋 いや、守護霊とは違います。日本では言えど氏神みたいなものですか。結構、抽象的なのが多いんですよ。「東の方の神」とか。で、この「バスブン」の中にはタブーがありまして、同じバスブンでは結婚できない。近親相姦になりますから。又、異なるバスブン間にもタブーがあって、人が死んだら何十日か敷居をまたいではいけないとか。——この「バスブン」は色んな所で見られるのですか？

土屋 チベットには全んどあるのじゃないですかね。ラダックでも同じことなんですけど、既に形態化されていて、あまり重要な要素を持ってませんが、ザンスカールは未だに強く残っています。

## ザンスカールの冬の生活

——さて、いよいよ81年には凍りついたザンスカール川の氷を歩いてザンスカールへ入られましたね。

土屋 ええ、あのルートは正味一ヶ月位ですかね。氷の上を通れるのは。

——冬のザンスカールに入ろうとした動機は。

土屋 先に言いました「ヨカン」の生活ですね、非常に面白いと思って、実際に見ないとダメだなと。それと、夏のザンスカールに行ってますと彼らの生活はやはり冬中心だということがわかってくるんです。全て夏は冬の貯えで、厳しい冬をいかにして越すかということは大変なことですよ。ですから厳しい冬のザンスカールを見ないことには彼らのことを語ろうにも語れないと思ったんです。

——なるほど。天候はどうでした。雪や寒さは。

土屋 三日に一回雪が降るけど大雪になることはめったにない。積雪は平均1m位です。僕が行ったのは2月から3月にかけてで、本当に寒い時期を過ぎてます。あの、パダムで聞いた時、今年はあまり寒くなく、一月に一度-40℃になったと、あと平均して-20℃位でした。

——ウーン、そんなに寒い感じではないですね。この雑誌(山・溪1981・8)で見ると着ているものは夏と変らんみたいですね。

土屋 いっしょですね。全んど、ただ靴はいい靴はいてますよ。

—— 食物は夏と冬と変わりますか。

土屋 ええ、夏は全んど肉は食わないですね。冬に肉を食べる。寒いからそれだけカロリーをとらないといけない訳です。

—— 冬の生活はどんな風ですか。

土屋 そうですね。大体、朝起きるのが遅いですよ。陽が昇ってかなり暖かくなしないと起きない。平均9時位ですよ。それで、起きてまず、お茶よりも何よりもスープを作る。

—— どんなスープですか。

土屋 ツアンバを入れドロドロにしたものに、チュルベという乾チーズを入れて、なおかつ、骨付の悪い肉を石で砕いてぶっ込んだやつです。向こうの人は骨ごと食べるが、僕は歯が悪くてしゃぶって終りです。それで身体を暖かくして、それから10時か11時に朝食を食って。

—— 昼間はどんな事をやっているんですか？

土屋 前日雪が降りましたらまず屋根の雪降ろしをやって土を出す。そこで陽にあたりながら毛糸をつむいだり、皮をなめしたり、お経を読んだり、これも仕事のうちですからね。

—— あの、燃料についてですが、前にパニカルのあたりで登山しまして、それで村人が三角のドツコにヤクの糞を一杯集めて運んでいるのを見たけど、あんなのを貯めて置くんですか？

土屋 あの糞はチェックと言うんですが、チェックと言って専門に置く部屋にファーと積み上げています。たいがい便所のわきですが、ただあれだけでは暖にならんですよ。だからかなり木を夏の間集めていますね。

—— 冬の間燃やす量といたら相当でしょうそれだけ集めきれんのですか？

土屋 いやあ集めきれないと思いますね。だから、かなり苦しくなります。だから本当に寒いマイナス40度位の日も誰も起きてこない。

—— じーとしているんですか？飯も食わずに。

土屋 じーとしている。だからその意味で僕は冬眠だと思っんですよ。

## 春を迎える儀式

—— ウーン、厳しいんですね。それで冬には祭りが多いと聞きました。

土屋 それはお寺のお祭りですね。ヘシスが夏でしょう。あとは全んど冬です。村では春を迎える儀式があります。春先に各家とか村で。

—— さっきの話のバスブンの神とかですね。どんなことをやるんですか。

土屋 五穀豊饒を祈るということなんですが、各家にはチョカンと言う 仏間があって、そのほか大きな家では神の部屋を持っているんですよ。

—— 仏間の他に神の部屋！それは誰も入ってはいけないとか。

土屋 いやそんなことはない。ただ他の家の人が入っちゃいけない。小さな家ではチョカンの中にあります。ラダックでは全部兼ねています。

—— その神の間には何があるんですか？

土屋 神様がありますね。御神体が。

—— 御神体とはどのような？

土屋 御神体とは矢なんです。矢とか木とか、枝とかわら束。それに色んな五色の布とかカタを張りめぐらしてある訳です。

—— 矢、枝とかわら束！ハハア、そうすると何か日本の標繩しめなわとか榑さかきとかあんなのに近くなってくる様な気がしますね。

土屋 そうです。だから日本でいう「破魔矢」<sup>はまや</sup>と同じでしょ。チベットは。その神の部屋の儀式なんですよ。春を迎える儀式は。

—— それは農耕と関係があるのですか？

土屋 農耕、牧畜両方あるみたいです。あの、生贄を出すんです。今は殺さないで「生贄」のデモンストレーションだけやるんです。

—— これはボン教とは違いますか？

土屋 宗教はラマ教です。ボン教がよくわかってないということがありますが。かつてザンスカールはボン教の宗本山と言われたこともありますけどどうですかね。

—— ボン教以前の古い原始的なものがあるということですか。

土屋 そうです。

## 生涯にわたる友人関係を

—— こうして見ると仲々面白いんですね。これか

らはどんなことをなさるお考えですか。

土屋 当分は行けないと思うのですが一生を通してチベットの研究を、研究と言うとおこがましいですけど。チベットの人間はどうなるか、ザンスカールの人はどういう歴史を辿っていくのかを見続けていたいというのがありますね。ラダック・ザンスカールで暮らして、その中でできた友情とか絆がありますし、そういったものが今の僕を形づくってくれた恩人でもあります。そういった人達にできる限りのことはしたいし。

——ええ、わかる様な気がします。僕らはヒマラヤに登り楽しんで、色んなものを得て帰ってくるけれど反面、現地の人に還すものを大して持っていない。むしろ、物価が上がったり人がこすくなったりという悪い種もばらまいている気がするんです。どうそのギャップをうめていけるかが僕自身にとっても課題だという気がしますね。

土屋 僕がヒマラヤの人達の中で学び、成長させてもらったものを、自分の生きている場というのは日本ですからその中で生かしたい。もっと地域に根ざしたものをみつけ自分の生活の根をしっかりと張ることができたら、次はそれをラダック

やザスカールへ持ち返ってみたいと思う。それと現在、急激な物質文明の波が押し寄せ、彼らがどう対処していかかわからない部分があると思う。この5・6年で伝統社会が崩れつつあるのを目のあたりにします。観光客があれだけどっと押し寄せると、それを目当てに野菜を作るんです。大麦の作付面積が変わり、一番金に換えやすい野菜とかに傾いています。小麦も増えつつあります。

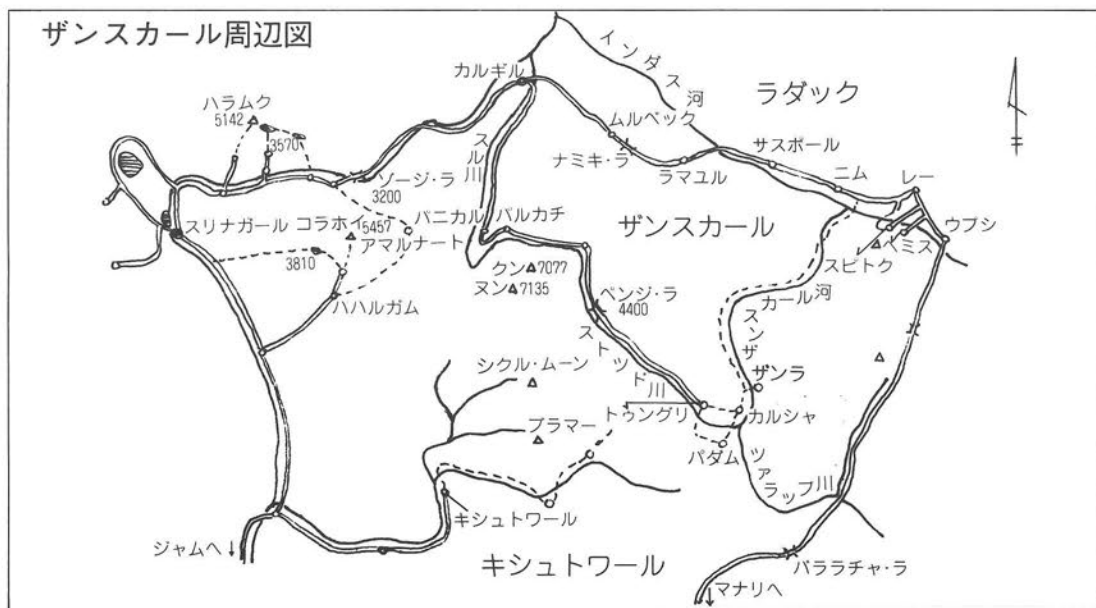
そういったものに対して、アドバイスと言えはおこがましいのですが、10年、20年のつき合をしていけば彼らの中で何らかの発言権を持てるようになるのではと思う訳です。取りあえずは日本での基盤を作ること。周辺的に彼らの文化なり、社会なりを記録することをお手伝いしたいと思っております。

——まだまだお聞きしたいのですが紙面の都合もありますので今度、『ヒマラヤ』に是非、ザンスカールの事でも書いて下さいよ。

土屋 ええ、いいですよ。すぐにという訳にはいきませんが。

——じゃあそういうことで。今日は忙しいところをどうもありがとうございました。

(インタビュー・構成 関 久雄)



### 訂正とおわび

- 1 2 4 号のヒマラヤ放談に以下の誤りがありました。訂正しておわび致します。
- 1 頁左下、ボゴダの時のが→…マナスの時の 前に五百沢智也氏が空撮しており山容はある程度判っている。と云うのが抜けていました。
  - 2 頁左上、チャンラの山容については10年も

## 地域ニュース

## 《インド》

## インド・ヒマラヤ登山料改定の訂正

先月のヒマラヤ124号でお知らせしましたインド・ヒマラヤの登山料に就きましては不明な点が多く問い合わせ中でしたが、此の度、下記のように判明しましたのでお知らせします。

—新登山料—

ナンダ・デビィ西峰、東峰	15,000R・S
ナンダ・デビィ内院のすべての山	10,000R・S
その他の21,000フィート以上の山	7,500R・S
その他の21,000フィート未満の山	5,000R・S

尚、これらの登山料は今年の登山隊から適用されるもので、昨年中に登山料を支払った隊も差額を支払うよう求められている。

## インフォメーション

## 東京ヒマラヤ集会のお知らせ

長い間お休みしました東京ヒマラヤ集会を再会したいと思います。会員の皆さん！ご友人などお誘いの上是非お出かけ下さい。

日時 3月29日(月) P・m 7時～9時  
於 HAJルーム

3月の東京集会は昨秋ドルジュラクバの初登頂に成功された法政大Ⅱ部山岳部の片岡隊長を囲んでジュガールの山々のお話を聞きたいと思います。

## 原稿募

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)各地の社会情勢、現地事情(入山事情)、登山隊の動勢など。

紀行 遠征、旅、トレッキング……ヒマラヤとそれを取り囲む地域のものであれば、何でも結構です。採用分には粗品を進呈致します。

## トピックス

ナルシン・M・S・プラダハン氏  
歓迎会開催!!

N・M・A(ネパール登山協会)の収入役・理事でもあるプラダハン氏は此の度、ネパール政府産業省のお仕事で来日されました。多忙なスケジュールの合間にHAJ主催の歓迎会が去る2月24日夜、新宿の酒亭・聚楽で行なわれました。当日はN・M・Aとの合同登山隊で関りのあったHAJランタン・リ隊、法政大Ⅱ部山岳部ドルジュラクバ隊やこれから合同登山隊で出かける都庁山岳部オンミ・カンリ隊、東海大山岳部ビック・ホワイト・ビーク隊、立正大山岳部それにプラダハン氏と旧知の方々など20名の参加者があり盛会でした。

プラダハン氏の厳父はヒマラヤン・ソサエティを創設された方であり弟のニット・マン・シン・プラダハン氏は、'75年の国王戴冠式記念登山(ネパール初の登山隊)の偵察に行った折、死亡し末の弟さんは現在、N・M・Aの専従として活躍しております。



## 集

日本からヒマラヤから ヒマラヤからの便り、ヒマラヤについて日頃思っていること、HAJや編集部に対する提言などもお寄せ下さい。

◎送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1-506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部

## 新刊図書一覧

- ・山を読む事典 徳久球雄編 東京堂出版 12月29日
- ・シルクロードわが旅 森 豊 六興出版 1月8日
- ・日本の野生植物Ⅲ 平凡社 1月8日
- ・雪に魅せられた人びと 小林禎作 築地書館 1月12日
- ・雪華図説新考 小林禎作 築地書館 1月12日
- ・花ごよみ「冬の花」 浅山英一他 創元社 1月20日
- ・藤内壁 岡田憲明 岳書房 1月23日
- ・青いケシの国 キングドン・ウォード 白水社 1月25日
- ・シナ奥地を行く ドローヌ 白水社 1月25日

- ・虫の宇宙誌 奥本大三郎 青土社 1月28日
- ・アムネマチン初登頂 上越山岳協会 ベースボールマガジン社 1月28日
- ・ヒマラヤに魅せられたひとニコライ・レーリヒの生涯― 加藤九祚 人文書院 1月30日
- ・山の天気予報手帳 飯田睦治郎 山と溪谷社 2月2日
- ・変わった山歩き手帳 横山厚夫 山と溪谷社 2月5日
- ・花の歳時記①早春の花 飯田龍太他 小学館 2月12日
- ・シルクロードに生きる 森田勇造 学習研究社 2月16日
- ・溪流物語 山本素石 朔風社 2月18日
- ・釣り場にて 田中祐三 朔風社 2月20日
- ・野の花1(フィールド百花) 大場達之 山と溪谷社 2月23日
- ・白馬・後立山連峰 山と溪谷社 2月24日

## 都岳連高所順応研究会開催さる

快晴の2月28日(日)午前9時より東京・岸記念体育館会議室において、東京都山岳連盟の主催により、「高所順応研究会」が開催された。

会の主旨が登山隊員の全員参加を期待していることもあって、遠く山形・京都・長野・愛知等の遠隔地はもとより近県の熱心な隊員約90名が参加した。

## ※「遭難事故の実態・特に高所障害の例」

山森欣一海外委員から、高所障害が原因で死亡事故を引き起した過去の幾つかの隊を例にとり、以下のようなことが話された。

- ①事故の直接原因が滑落であっても、そのほとんどが高所障害を受けていることが原因と思われる。
- ②アタック態勢が整ったならばベースキャンプ以下で休養を行い蓄積疲労をとってアタックすべきだ。この型にならない場合は、アタックは中止すべきではないか。

## ※「高所障害事故の実例」

'81年クン峰で死亡事故を出した隊の松本寿行

氏から詳細な報告が行われたが特に反省として、

- ①本人の体力以上の行動が原因ではなかったか
- ②無人の上のキャンプに酸素を配置していた
- ③医師は必要だった
- ④事前に勉強しても現場ではどの程度の障害を受けているか把握しづらい

等が報告された。

'81年カンチ隊で6,000m台で重障に陥った例が紹介され、又、この2つの例が、高所障害のラインとされる。6,000m台と4,000m台で似通った誤ちをしていることが指摘された。

## ※「高所医学について」

青梅市立総合病院の三村芳和先生から基礎的な話しがあった後、質問に入った。特に、肺水腫の時は下に降ろすことが第一に大切で、酸素を吸わせることで回復しない場合もあることが指摘された。質問が多かったため予定時間を大幅に超過して終了した。尚、会議の合い間を利用して本年、カラコルムへ向かう隊の合同打合わせ会が委員の手で設定され隊から感謝されていた。



# 札幌ヒマラヤ会議報告

前日に二ツ玉低気圧が通過した札幌では冬型の気圧配置へと逆戻りし小雪がちらついていましたが道内各地から30名程の参加者を得て札幌ヒマラヤ会議は開催されました。

日時 57年2月21日(日)10時~17時

場所 札幌市西区民センター

会議は中川氏の司会で進められ北海道H A Jグループの世話人代表である阿部さんより挨拶があり山森、尾形両講師の紹介がなされた。引き続きて参加者の自己紹介がなされ日程に入った。

会議に先だち山森H A J事務局長よりヒマラヤ会議の趣旨説明とナンダ・カート峰遭難事故に対するカンパ御礼の挨拶があり本題へ入った。

「カンチェジュンガ学術遠征隊報告」

(10:35~12:00)

はじめの20分で山森カンチ隊長よりカンチ計画の立案から実践までの経緯について説明があり、当時未解禁峰の最高峰として残っていたカンチ南峰や中央峰のオープン化の働きかけや南峰~中央峰~主峰への縦走から資金都合に依り西峰~主峰への縦走へと計画を縮小せざるを得なくなったいきさつ、さらには現地入りしてから交差縦走に踏み切り結局縦走には失敗してしまった事をタクティックス等をはさみながら報告される。

其后、二巻にわたる八ミリの上映で日本出発から頂上までの報告があった。機械操作の不慣れさと同時録音でない煩わしさから余り芳しい上映ではなかった。

「ヒマラヤ登山とトレーニング」

(13:00~14:20)

講師尾形より高校山岳部時代の基礎体力作りから始めてその後、ツクチェ・ピーク、ヒマルチュリ、カンチェジュンガへと六千米峰、七千米峰、八千米峰へと順次立ち向う中でどの様な鍛錬をして基礎体力を培いかい臨んだか、そしてその結果どうであったかなど体験的に話す。

高所登山のトレーニングとして心肺機能の鍛錬は良く云われる事であるが、その心肺機能トレ-



ニングとして山岳を利用したパフュー方式トレーニングなどおもしろい方法が紹介された。

「ヒマラヤ登山事故の分析と防止」

(14:30~16:00)

山森講師より、80年、81年のヒマラヤに於ける日本隊の遭難事故を例に事故分析と事故防止に就いて熱い口調で話された。

事故防止の基本として目標設定にあたっては、国内で行なっている自分達の登山をベースとして山を設定すべきでありヒマラヤだけが独立してない事を知るべきである。山の中に入ると登山者の持つ習性として撤退することは非常に難しく誤った意味での良い方向へもっていかうことになるので国内での申し合わせ事項については必ず文書で取交し遵守するようにしなければならぬ。……等死なないためのノウ・ハウに就いて力説される。

「ナンダ・カート峰遭難事故報告」

(16:00~16:45)

ナンダ・カート峰遭難事故報告については時間の都合上、八ミリフィルムの後編のみの上映にて終える、ビンダリ河のアプローチを見て貰えず残念であった。

以上で会議は終了し、その後は夜の分科会へと会場を移し遅くまで賑やいだ。

準備に携わって下さった北海道の世話人の皆様ほんとうに御苦勞様でした。



ドルジェ・ラクパ

DORJE LAKPA 6989m

—1981—

法政大学・ネパール合同ドルジェ・ラクパ登山隊

▲  
バレピー・コーラ右股氷河とドルジェラクパ (五百沢智也氏提供)

## はじめに

我々法政大学Ⅱ部山学部OB会の中の、若い者達を中心に、次回のヒマラヤ遠征のための、ヒマラヤ体験として、とにかくヒマラヤへ自分達で出ようという気運があり、当初はトレッキングピークを考えていた。こういう時、カンチェンジュンガの先発隊としてカトマンズ入りした片岡が、近郊ドルジェ・ラクパがオープンされるらしいという情報を聞きつけ、早速ドルジェに向かって、国内、ネパール両方で行動を起こした。

ドルジェ・ラクパは、ランタンヒマールと、ジュガルヒマールの接点に位置する未登峰である。その秀麗な姿は、カトマンズからもすばらしく眺望でき、かねてから幾隊かが、その登頂を狙っていた。

我々は、カンチェンジュンガを終わった後、6月にランタン・リとドルジェの偵察に入った。ルートの可能性も見出し、許可の内諾も取ったのであるが、7月に突然に、合同の相手としたネパール登山協会(NMA)が合同の方針変更を打ち出

し、我々は苦境に立たされてしまった。その際もHAJの菊地評議員がカトマンズに飛び、ランタンリ、ブリクティールと共に強力で渉外してもらった。ポーターの怪我や、ネパールメンバーとのトラブルなどあり、大幅に予定より遅れてしまったが、10月18日、日本人4人とネパール人1人が、ドルジェ・ラクパの処女ピークに足跡を残すことができた。

## アプローチ

8月23日、4人の隊員が、カトマンズに入り、カトマンズに滞在していた片岡と合流、全員が揃う。9月2日には、ランタン・リと共に観光省、NMA関係者と合同のために、レセプションの席をもった。

9月5日、バスとトラックでトリスルへ出発。6日、53名のポーターでキャラバンが出発する。連日雨の中のキャラバンとなる。

9月10日、ゴラタペラに着く。モンスーンが明けたようで、久々に晴れ上り、ランタン・リルン

の秀峰がすばらしい。全員感嘆の声をあげながら、濡れた装備を乾かす。

9月11日、ランタン村で、ポーターの約半数を入れ替える。水量が多くてランシサ・カルカの渡渉ができないため、キャンジュンゴンパの下から、ランタン・コーラの左岸を遡る。キャンジュンあたりから、数人が頭痛を訴え始める。

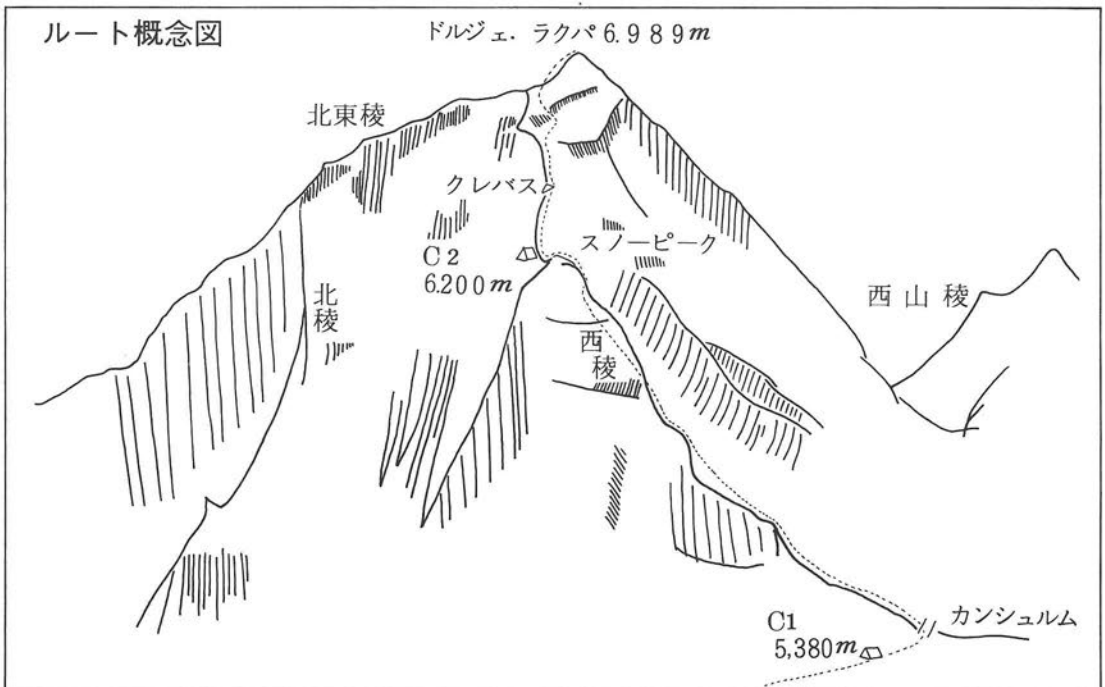
9月13日、ランシサ氷河上、4,750 m地点のランシサ・リからのアイスフォールの手前で、ポーターが何としても動かなくなってしまった。予定より150 mも低い所だが、9名の強いポーターを残し仮BCとする。

9月14日、9人のポーターで、BC予定地点の4,900 mまで荷上げを行うも、1人のポーターがガレ場で転び、足に15針も縫う怪我をしてしまう。荷上げを断念して背負って下すも、出血が激しく、ポーターには保険をかけてないので、気が気でない。ランシサ・カルカまで下りて、ランタン・リ隊の結城ドクターに手術をお願いする。快く対岸から氷のような水の中を腰迄の渡渉をして来ていただいたドクターには、全く頭の下がる思いであった。隊員は当初予定した通り、ランシサ・カルカで順応のために休養する。

## 登攀開始

9月17日、安全祈願の「ハタケ」の儀式の後、C1に向かって荷上げを開始する。ランシサ・リに沿って右岸を行き、ランシサ・リが終るあたりからランシサ氷河を横断する。氷河は非常に不安定であり、ランシサ・リからの雪崩、落石の危険もあり神経を使う。C1(5,380 m)は、カンシュルムとのコルの直下に作る予定で行ったが、距離が長く、途中で2ヶ所デポを作った。デポを作ると、ロスが多くなるが、順応の程度等考えると、どうしても仕方なかった。氷河からは中央にある岩山の右のルンゼ通しに登り、懸垂氷河に取り付く。C1地点まで偵察していたのであるが、3ヶ月で大分氷河の様子が変わっており、縦に走るクレバスを抜けて右上する。終始コンテで歩く事となった。

9月21日、C1(5,380 m)を建設する。BCからデポ地点までは、初期の頃より1時間以上早く着けるようになる。C1地点は広大な雪面の中であり、雪崩、落石等の心配はまずない。ただソニーのリトルジョンでは、BCと交信が入りにくく、交信の度にC1から下に10分程下る事が必要だった。

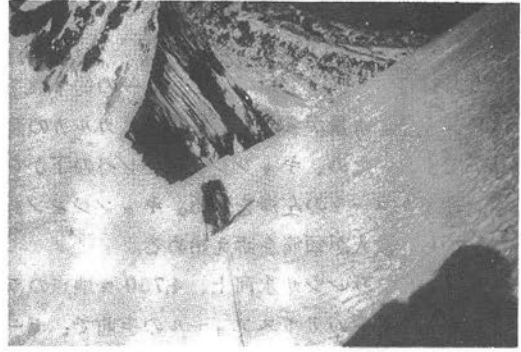


9月24日、全員でC1に入る。内村の順応が思わしくなく、息苦しさを訴えるため、医療用の酸素を使う。しかし毎分1ℓ程度では、ほとんど効果が得られなかった。村上、真行寺パーティーは、C1の上に4P程ルート工作する。偵察した際、アプローチの容易さからランタン谷から、行くしかないと判断した。ランタン側から登るとなると、3つのルートが考えられたが、ビッグ・ホワイト・ピークとのコルへ上るルートは、懸垂氷河の真下を登るため危険が多過ぎる。北稜は余りにも傾斜がきつく、ちょっと手が出ない。我々の力で登るとなると西稜以外には考えられなかった。我々は計画自体を全て簡素化するために、ハイキャンプは2つとした。こうすると各々のキャンプ間が7~800mの標高差となり、遠くなる事を覚悟していたが、荷上げ、アタック等はさほど問題にはならなかった。

9月25日、内村は好転せず、同じく調子が悪くて動けないネパール側リーダーと共に、B・Cに下りた。村上、真行寺、安部は西稜の第2ステップ(5,980m)までルート工作を行う。西稜は予想以上に傾斜がきつく、雪というよりは氷に近い状態であり、フィックスロープを多用した。1,500m持参したフィックスも大部不足して、最終的には下部は全て回収して、上部で使用した。毎日午前10時過ぎにはガスと雪になり、ルートファインディングに苦勞させられた。第2ステップの下の幅10m程のクレバスは、当初左側から捲くつもりであったが、距離的にロスが多く、右の雪稜にルートを見出し抜け出た。

## ネパール側メンバーの造反

9月26日、スノーピークを越えて、6,200m地点をC2とする。スノーピークからは岩稜となり、雪庇と岩稜の微妙なコンタクトラインを3P程行く。C2地点は雪庇を切り拓いて作ったもので、狭く、常にアンザイレンする必要があり、余り快適とは言えなかった。この日ネパールメンバー2名は(1人は既にBCで休養中)、C2への荷上げ途中で、スノーピークの下で荷物をデポして逃げ帰ってしまう。C1に帰ったものと思っていたら、何とそのままBC迄下ってしまった。



C.2 上部氷壁を登る隊員

9月27日、降雪が激しく、行動を見合わせる。湿った雪の除雪に忙しい。片岡はネパールメンバーの説得のためにBCに下りる。リエゾン・オフィサーの判断に一担任せる事にする。この日から3日間降雪となる。

9月28日、雪は降り続き、思い切ってC1のメンバーも、休養のためにBCに下りる。ランシサ・リからの雪崩に注意して、雪に覆われた歩きづらいモレーンを下る。BCでは説得工作を続けるが、態度に変化はない。

9月30日、3日間降り続いた雪も止み、青空が顔を出す。BCでの積雪はトータルで1m位であった。この3日間に秋の事故が続発した訳であるが、我々は幸か、不幸かBCで説得工作に当たっていた訳である。3日間の説得の効なく、ネパールメンバー3人と片岡は、カトマンズまで下りて、ミーティングを仕直す事にする。やり切れない気持ちでBCを後にする。ランシサ・カルカでの交信で、ランタン・リ隊の順調な様子を知る。あと4日あれば登頂出来るところまで来て、これから15日間、登山活動を中断する事となる。

10月2日、内村、安部はルート整備と順化のため、C1に入る。村上、真行寺とコックは若干の食糧の買い出しに、ランタン村まで下る。

10月4日、内村隊はC2へ荷上げ、村上隊はランシサ・カルカへ戻る。片岡は3日にカトマンズ着。この日観光省でミーティング。ネパールメンバーはここでも話し合いに応ずる態度はなく、逆にレポートを出されて、その対応に苦勞する。5日より7日間のダサインの祭りに入る。

10月10日、村上隊はC2上部のクレバス迄のル

ート工作。内村隊はランシサ・カルカまで薪取りに下る。片岡は新しいシェルパ1人をネパールメンバーにつけ加える事に成功、カトマンズを出発する。新しいメンバーは、春のカンチェンジュンガのセカンドサードであった、ペンバ・ツェリンである。

10月14日、隊員はBCで休養。片岡はBCに戻る。全員の無事な様子に喜ぶ。兄弟クラブとも言える、明治の駿台山岳部のガンガブルナと、ナンダカートの藤倉さんの事故のニュースに、一同かなりの落ち込みがある。絶対事故を起さない事を決意する。

10月15日、登山活動再開。調子のいい村上、真行寺パーティが先行して、C2の上にもう1日ルート工作を行う事とする。天気は安定して来ており、頂上への自信を強める。

10月17日、村上隊はC2の上、三角ピークと呼んだ雪原の入り口までのルート工作を行う。C2から上は更に傾斜がきつくなり、斜めに傾いた氷壁であるため、片足だけが疲れる。高度感バツグンであり、両側にスッパリ切れた氷の登攀はすばらしい。残り3人もC2入り。

## 初登頂

10月18日、ヒマラヤ初見参の隊員が多い事と、ファイナルキャンプの上に、2日間ルート工作を済ませている事もあり、同じ日に全員を2隊に分けてアタックする事にする。2時に起床、ラーメン雑炊の朝食をかき込み、4時にC2を出る。快晴であるが風は強い。すばらしい星空と、カトマンズの灯に感激しながら登る。前日のルート工作終了点に、7時に着く。懸念されたクレバスは、下部がほぼ埋まり、上は30m程の壁になっているが、右側の低い部分から、何とか捲いて登る事が出来た。上部は予想外の広大な雪原になっており、西稜の肩に出るのに3時間余りを費してしまう。膝上のラッセルと部分的にクラストして、ウエハウス状になった雪に悩まされる。縦横に走るクレバスを抜って中央部から左にトラバースする。頂上直下の大規模な雪板雪崩の跡が、何とも無気味である。気ばかりあせるが、なかなかピッチは上らない。肩からはそのまま、西稜通しに行く予定

だったが、想像以上に傾斜がきつい事と、雪崩の跡がハンクしている等の事があり、少し平坦な北東稜側に頂上直下を回り込んだ。この辺は傾斜も落ち、雪面といった感じであったが、風が強く地吹雪である。すばらしい景色に圧倒されながら、11時45分、先行のペンバ・ツェリン、村上、真行寺が頂上に立つ。風が強いため10分位で早々に下山する。後発は頂上直下約50mの地点で、内村の疲労が激しく、帰りにフィックスのない部分が多い事もあり、登頂は断念して下り始める。すぐに登頂隊が合流して、意外に頂上が近い事が判り、片岡と安部が頂上を目指す。12時40分登頂。遠くクープのマカルー、ローツェ、エベレスト、チョーオユー、目の前のビッグ・ホワイト・ピーク、ブルビチャチュ、ゴザインタン、ポーラガンチェン、ポーロン・リ、ランタン・リとすばらしい山の大パノラマである。その向うには、無愛想に赤茶けたチベットの大地が広がっており、目を見張る。以前からドルジェ・ラクパは双耳峰であるという話があり、頂上で確認したが、双耳峰と言われたのは、西山稜(ドルジェ・ラクパから南に派生している尾根)上の2つの峻峰とドルジェを一緒に見た時の観察であろうと判断した。頂上は幅1~2mの細長い雪のピークであった。帰りが心配だったので早々に下る。その頃は風もややおさまり、何か登頂した事が嘘のような気持ちだった。途中の悪いトラバースにフィックスがなかったため、通過に時間を食う。内村はこの時、ピッケルやザイルが2本に見えると訴えていた。事故を起さないように慎重に下りC2に4時に着く。やはり全員疲れた様子で早々とシュラフにもぐり込む。

10月19日、C2からBCに下る。全装備を背負ったため、全員バテ気味であり、特にC1からは日本でのポッカ山行のような有様であった。重荷のため、フィックスの回収は断念する。10月も中旬を過ぎると風が冷たさを増して来る。通い慣れた氷河をBCへ。

10月20日、予定より2日早くポーターが上って来たため、あわててパッキングを済ませる。何だか長いようで短かったこの登山をかみしめつつ、21日、17個の荷物と共に下山の途につく。

10月22日、ランタン村でポーターをチェンジす

るも、トレッカーとかち合っしまい苦勞する。  
10月27日、カトマンズ着。

## 合同登山の難しさ

現在我々が合同できる相手としては、ネパール登山協会(NMA)、警察、大学等があるが、NMA以外は強力なコネクション、渉外力が必要となり一般的ではない。NMAの中でも、合同隊のメンバーになる資格があるのは、マナの登山学校の卒業生に限るという規定がある。マナの卒業生というのは、現在100名少々居るが、この連中は概して実力がなく、要領のいい奴が多い。合同隊も増えてくると、この中で優秀なシェルパをメンバーに選ぶというのは、至難の技である。全ての装備、食糧を支給して、保険も給料もサードー並みに支払って、それでメンバーというのは何か釈然としないものである。反面彼等は、メンバーとしての誇りだけはしっかり持っており、その辺の折り合いがむずかしいところである。我々は若い事もあって、甘く見られて、彼等ネパールメンバーを使い切れなかったのが真相であるが、我々はとにかく貧しい隊であり、切りつめた遠征だったので、食事のメニュー等も貧弱であり、一層厳しさに迫車をかけた。合同の場合は、ネパール人が登頂しない事には、我々は登れない訳であり、彼等が病気になるたり、ストライキを起した時には、全くどうしようもない。我々の場合、3人のネパールメンバーのうち、2人が不調で全く動けない事と、彼等同志の不仲もあって、あらゆる手を使って説得を試みたが、だめであった。彼等が出して来た14項目の問題について、1つ1つについて解決していても、理屈で解っても感情で動かないという状態であった。一度C1で動かないため、私がピッケルを持って怒ったのであるが、それが「ネパール人を殺そうとした」というレポートになり、その解決にも非常に苦勞した。解った事は、ケンカして絶対得はしないという事だけであった。我々は合同というだけで約120万円位の出費を考えなければならなかった。もし我々の隊にもドクターが居れば、不調の者を診断し証明書を書けば(調子の良い奴で登る気のない者もニセの診断書を書く)日本人だけで登頂できた

かも知れないが、それもできず、最良の方法としてカトマンズに一度下りて、ブリーフィングをもう一度する他なかった。登山自体は日本人5人で全く問題はなく、登頂目前にして登山を中断するというのは、口惜しいやら、情ないやらで泣くしかなかった。幸い我々は全員休暇の心配もなく、食糧、燃料も少し補充すれば全く問題がなかったため、15日間も中断する事ができたが、普通の隊なら、あの時点で遠征を中止するしかなかったと思われる。我々の場合が特別かも知れないが、今後の合同隊でも少なからずこの種のトラブルがつきものではないかと思われる。

## おわりに

今回の遠征は、発想から出発まで半年位の期間しかなく、資金的にも大変苦しいものであり、隊長が日本にいないという事もあり、隊員は大心苦勞したようである。許可取得、現地での渉外等々、エクスプレストレッキングのランジャン氏、HAJの菊地氏には並々ならない御協力を頂いた。登山中はランタン・リの方々には、随分元気づけられたり、ドクターの御助力を頂いたり、大変力強い思いであった。HAJのカンチ隊の御協力で、かなりの量の装備、食糧を借用したり、寄贈してもらったりして随分金銭的に助かった。ドルジェの西稜は期待した通りの、すばらしいルートであり、そのすっきりした稜と登攀のすばらしさは、それぞれの隊員の胸に強烈に焼きついたものと思われる。この経験を生かして、更に大きい目標に向かって前進してゆきたいものである。

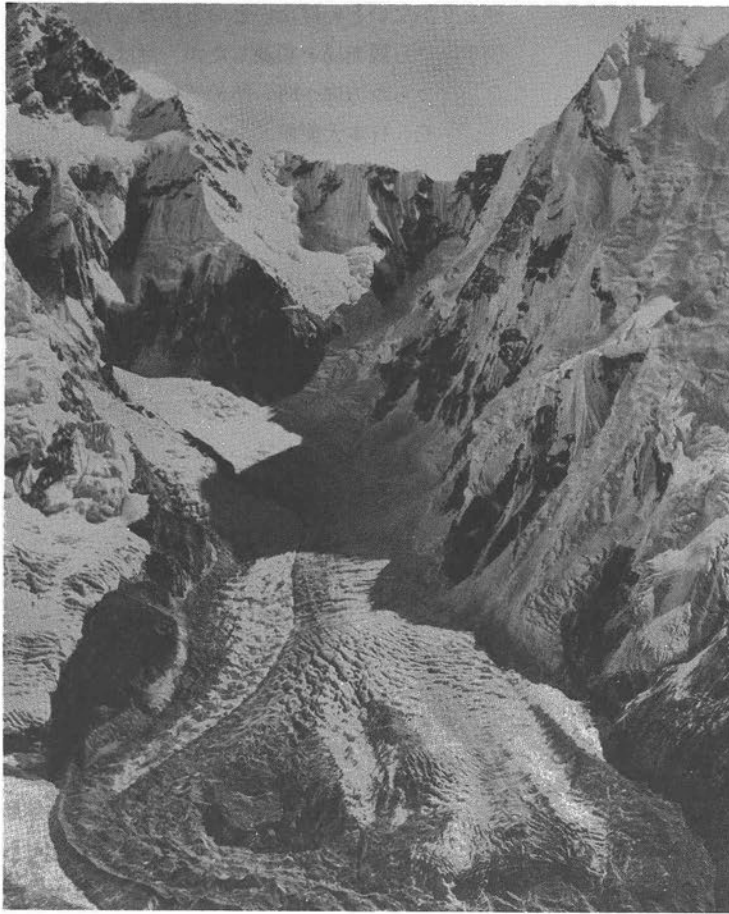
(片岡 邦夫)

## 隊の構成

隊長 片岡邦夫(27)  
副隊長 村上和也(26)  
隊員 内村友宏(26) 安部 誠(24)  
真行寺栄一(24)  
ネパール側メンバー アン・テンリ(26)  
ベンバ・ツェリン(38)  
アン・パサン(26)  
ブー・ドルジェ(21)

# カンチェンジュンガ学術報告—2—

五百沢 智也



▲ヤルン氷河

1981年日本カンチェンジュンガ学術遠征隊学術部門第2次調査(秋季)の活動について、その概要を報告する。

## 第2次調査隊の目的

- (1) 空からの写真撮影  
地形分類図、氷河調査図等の作成のために必要

なカンチェンジュンガ山城全部をカバーする写真の撮影を実施する作業。春季第1次隊の実施した現地踏査作業と相まって前述作業の完成に資する。

## (2) 地形分類のためのサンプル調査

撮影した空中写真の判読作業に必要な鍵を現地で獲得するための調査。カンチェンジュンガ山城或はその周辺地域の踏査を考えていた。

## (3) 資料調査

前述の作業のために必要な既存の空中写真、地図、参考文献等の資料を収集し購入する作業。

## 第2次隊の編成

隊長 五百沢智也(48) 宇都宮大・愛媛大学講師、氷河地形学、地図学。

隊員 小野 有五(32) 筑波大学講師、地質学氷河地形学。

## 行動記録

出発 1981年11月7日

帰着 1981年12月5日 計29日間

11月7日 AI315便にて成田発バンコック泊

11月8日 RA402便にてバンコック発カトマンドッ着。エクスプレス・ハウス泊

11月9日～11月18日

カトマンドッにて飛行機チャーターのため、ネパール政府関係機関、R

NAC、UNDP、日本大使館を歴訪、最善の努力を重ねる。

11月19日 UNDPのピラタス・ターボ・ポーターのチャーターにより、カンチェンジュンガ周辺の高度7000メートルの撮影飛行を実施した。パイロットはキャプテン・ヒューラー。

11月20日～11月28日

日数が少ないこと、カンチ周辺の入域許可のとれないことのために、陸路手軽に入れるポカラ北方、マチャブチャリ山麓に目的地を変更し氷河地形調査を実施した。

11月29日 鉱山局に岩石サンプル持ち出しのための許可書を申請する。夜、モリッシューレストランで、H・グルン博士、オッリ測図局長、シャルマ登山部長と会食。

11月30日 測図局にて地図作成作業の現況を訊く。資料調査実施。鉱山局書類入手。

12月1日～2日

航空貨物の通関手続き2日がかかり。小野隊員は2日カトマンドゥ発。

12月3日 五百沢カトマンドゥ発。小野成田着。

12月5日 五百沢成田着。HAJ事務所泊

## カンチェンジュンガ山域の撮影

RNACのピラタス・ターボ・ポーターは、3機あるが1機は破損して使用不能、もう1機は部品欠のため飛行不能。やっと1機のみが稼働できる状態であったが、10月、ピラトナガルからタブレジュンに離陸して間もなく墜落破壊してしまった。パイロットこみで定員7名のところへ10名塔乗、荷物も満載したため空中分解したのだと言われている。スズめタクシーさながらの航空機利用は、バンコク＝カトマンドゥの727のフライトでも毎度のことであり、RAの利用は再考を要する。さて、こうした事故のために、我々の計画も大支障をきたしてしまっただけでなく、部品欠の機体に2週間もすれば部品がとどくからまかせてもらいたいとRAの職員は言うが、いつまでたっても

同じ答がかえってくるに違いないことを我々だって先刻御承知である。

宮原さんに聞くと、人命救助等緊急の場合は、UNDPの持っているもう1機のピラタス機を利用させてもらうことができるのだが、それには、それなりの大義名分と国連側の飛行機運用計画のゆとりがないといけなという話だった。そこで測量局やら観光局と相談したが、話はこじれて抜きさしならぬ方向へ向い始める始末であった。そこで一転、日本大使館の嶋崎書記官に頼んで、我々の仕事がユネスコのIHP雪氷委員会の要請に基づく氷河台帳づくりに関連するものであり、カンチェンジュンガ周辺のフライト実現に協力を依頼するという文書を小森参事官のサインで作っていただいた。小森さんは、かつて書記官時代にもカトマンドゥの勤務であり面識のあったのは好都合であった。UNDPでもアシスタント・ダイレクターとお会いしてお願いしたところ実務のもの相談して可能ならやりなさいと言うことになった。計画課の人、キャプテン・フューラーなどと討議の結果、19日以前なら可能性があり、それまでにRNACのチャーター・セクションのOKと、フライト管理部門の許可を文書でもらうようにということになった。このRAを動かして文書をもらうということが割合大変なことであった。再び日本大使館より2通の依頼書をもってこれらの部局の頭にとどけ、紹介状やら電話依頼の手をいろいろ使って18日の夕刻、書類をUNDPにとどけた。「遂に文書を手に入れましたか、では明日は飛びましょ。」ということで、向うさまは、あてにしていなかったような感触だった。19日のフライトはバフルー経由のもので、ここに森林局の外人2人をおろし、スライド式横ドアをひもでしばって半開きの型で固定し、横向きの撮影態勢に入った。空は快晴だが山頂はすこしばかりの雪煙をあげていた。フューラー氏は、あれはいけない兆と言ったが、なるほどヤルン氷河をラムゼーあたりまで入るといきなりガタガタブンと乱気流のあおりが始まった。かくして氷河中央線沿いの直線飛行はだめとなり、グンサからロナクあたりそしてツェラムと周辺部の周遊飛行でいどが精一杯であった。



## ヒスパー山群 その2

杉本 忠男

今年のパキスタン方面への登山許可も出そろったようだ(P.18参照)。一昔前とちがって登山申請数が年々減少しているため、8,000 m峰以外なら大方は第一希望の山が許可されるようだ。さらに興味深いのはパキスタン山岳会によるリザーブド・ピークといわれていた山も許可になっていることだろう。観光省としては年々登山隊が減少している現状を考慮しての処置なのだろうか。(パキスタン山岳会では観光省に対して約20のピークを指定し、今後これらのピークの最初の登山許可をパキスタン山岳会に保留しておくよう申請した。そして2年前から認められたことになっているのが以下のピークだ。ウルタルⅠ峰、同Ⅱ峰、ドバニ、ユクシン・ガルダン・サール、プマリ・チッシュ、K6、スキャン・カンリⅡ峰、プバラッシュ、バコー・ダス(マンゴ・グソール北方)以上9つのピーク。)この中でユクシン・ガルダンは数年前禁断の地シムシャル側から入山すべく、日山協やJACがパキスタン山岳会に合同隊の話を持ちかけていた。ところが昨年観光省が神大隊に許可を出してしまったのでパキスタン山岳会側はメンツがつぶれてしまい、観光省に抗議した経緯があるらしい。そのあおりで今年の許可は合同隊の条件がついてしまったのだろう。さて今回はその問題の山、ユクシン・ガルダンから始めよう。

### ユクシン・ガルダン・サール C7530m

現在登山許可が取れる山の中で、世界で最も高い未踏峰である。この山はヒスパー山群の主脈から北に大きくはずれているため、シムシャル側の入域が禁じられている現在は接近するだけでもひと苦勞だ(今年からシムシャルへ入域可能とする未確認情報もある)。しかもどの面も急峻な稜や

岩壁に囲まれて、技術的にもなかなか難しい山だ。

この山の南面からのアプローチはやはりクンヤン氷河からクンヤン北峰の北のコルを越え、長さ20 km近いアッパー・ヤズギル氷河を縦断するしかないようだ。南西から遠望すると頂上の南西側から浅いクローアールがアッパー・ヤズギル氷河に落ちているごとく見える。一時はこの雪のクローアールから比較的容易に登頂可能とみられていた。だが実際にはこのクローアールは標高7,000 m附近から東南に向きを変え、ユクシン・ガルダン氷河へ落ち込んでしまうので登攀ルートには使えない。南稜は頂上から直接ではなく、西稜上のピナクル(標高約7,400 m)から派生している。アッパー・ヤズギル氷河からはこの南稜を忠実にたどるルートと、前記ピナクルの南西面を登るルートが考えられる。南稜は6,800 m附近から岩場がはじまり、途中さらに2つの大ピナクルを越える困難なルートだ。この3つの大ピナクル攻略のための登攀具や食料等を、あの長大なアッパー・ヤズギル氷河最上部に荷上するの大きな問題点となろう。標高7,500 mの山だが、このルートでは8,000 m峰のタクティクスを考える必要がある。ピナクルの南西面は下部が雪の急斜面、上部は岩と雪のミックス壁だ。おそらくこの山の中では技術的には一番やさしいルートであろう。だが雪崩の危険がつきまとい、雪質がよほど安定しているときでないときに取り付けにくい。

シムシャル側からのどのルートも難しそうだ。まずヤズギル氷河は下部が荒れていて、アッパー・ヤズギルへのルートには使えないようだ。東壁及び北西壁は高度差2,000 m以上の大岩壁で、この壁が登攀の対象となるにはまだ何年かかかるだろう。北東稜も下部に大きな岩壁がありちょっと手が出せない。北面から最も可能性のあるルート

は北稜だろう。だがこの北稜とてスキリッシュ・サールとのコルから上部約1,200 mほどが圧倒的に切り立った二段の壁だ。下部はヒマラヤ襲をつけた高度差700 mほどの雪壁、上部は高度差300 m以上の雪も付けない急峻な壁に近い岩稜だ。この山に限っていえばシムシャル側がオープンされてもそう簡単に登れる山ではないだろう。

1981年始めてこの山に挑むパーティが現われた。神大高校OB会の6人で、クンヤン氷河からアッパー・ヤズギル氷河を縦断して南稜に取り付いた。しかし悪天候にわざわざされて核心部のピナクルの岩場にはまったく触れず、標高6,800 m附近で引き返したようだ。

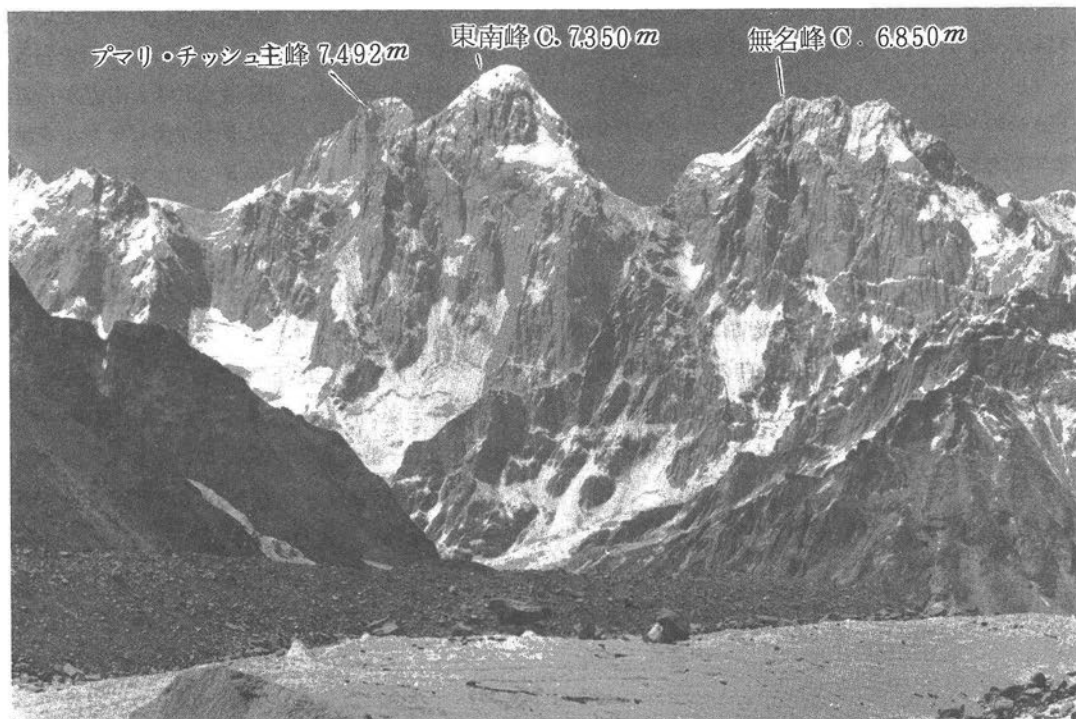
### 無名峰C.6820m , C.6830m

アッパー・ヤズギル氷河に立つと、ユクシン・ガルダン・サールの西稜上に東西に並ぶ美しい双耳峰が目にとまる。C.6,820 m(東峰)とC.6,830

m(西峰)だ。高度はJ・ワラの資料によったが筆者は東峰の方がやや高いのではないかと思っている。東峰は東南の雪の斜面からクレバスを避けて、また西峰は雪の南稜通しに登れるだろう。

### 無名峰C.6850m

プマリ・チッシュとジュトマル・サールを結ぶ稜線上の最低コルのすぐ西にあるこのピークは、今のところまったく目立たぬ存在だ。東南面のジュトマル氷河側はのっぺりとした雪の斜面でどこも雪崩の危険がある。アッパー・ヤズギル氷河側もやはり雪の斜面だが、こちら側は雪質さえ安定すれば容易なルートが2~3本ほど考えられる。この山はC.6,820 mやC.6,830 m峰とともに、アッパー・ヤズギル氷河周辺の7,000 m峰の第二登三登と、これら6,800 m峰の初登頂とを組合わせたかたちで狙われるのではないだろうか。



▲ジュトマル氷河からプマリ・チッシュ

プマリ・チッシュ主峰 7492m ,  
東南峰C.7350m ,無名峰C6850m

この山のジュトマル氷河側はどこも胸のすくような一大岩壁を連ねて圧巻だ。主峰は主脈からやや北にはずれているが南面からも望むことができる。1974年オーストリア隊が、特別な許可を得てこの山を北面からねらった。だがヤズギル氷河下流が荒れていて登高不能だった為、プマリ・チッシュにはまったく手を付けずに終ってしまった。主峰は1979年北海道岳連隊により北稜から登られた。アプローチはクンヤン氷河からクンヤン・チッシュ北峰の北のコルを越えるルートがとられた。別の山を一つ回り込んでから目的の山に取り付くという非常に遠大な、そして大胆なルート転開だった。この隊は当初この山の南面または東面からの計画で登山申請した。しかし後にこれらの面が大岩壁とわかり、前記の遠大なルートに変更せざるを得なくなったのが真相のようだ。本来ヒマラヤ登山は、特に未知の要素の多い山では、たった一回の登山ではなかなか登れぬ場合が多い。最初は偵察や試登等によるアプローチや地理的解明等があって、それらの資料をもとに登頂成功に導びかれるのが一般的であろう。そういう面では北海道岳連隊はアプローチ・ルートがみごと凶に当り、とても幸運だったといえるだろう。

主峰西稜は技術的にはやさしい雪のリッジだが北からのアプローチでは北稜と大差がなくあまり興味が湧かない。それよりジュトマル氷河側の大岩壁を越え、さらに西稜へ抜けるルートはどうだろう。クンヤン・チッシュとのコルの西側や東側の岩壁は、上部の傾斜が落ち可能性がありそうだ。

東南峰(C.7350m)は東峰と呼ばれたり南峰とされたりしてまぎらわしいので、ここでは東南峰とした。このピークは北海道岳連隊によれば、主峰の延長上にあるただのコブでピークとは認めがたいそうだ。はたしてそうだろうか、大方の山は上から見降ろすと魅力がなくなってしまうものだ。世界一美しい山とスイス隊が絶賛したプモリ(7,145m)ですら、エベレストの上部から見降ろせばやはり稜線上のただのコブとしか見えぬし、プマリ・チッシュ主峰もクンヤン・チッシュ上部

から見るとクンヤン・チッシュの属峰に見えたと東大隊は知っている。やはり山は下から仰いだり対岸から眺めたりしてはじめて様になるものらしい。筆者はこのプマリ・チッシュ東南峰を南面から見上げたとき、登攀価値が十分ある山だと感じた。それどころか高度差2,500m以上もある南壁は、数年後にはヒマラヤのビッグ・ウォールの一つとして大きな目標になるであろう。北面も高度差1,000mほどの岩壁だ。東稜は7,000m附近に岩場が一ヶ所あるが登攀可能だろう。東稜のコルへ上るルートとしてまずジュトマル氷河側のルンゼが考えられる。しかしこのルンゼは筆者も奥のぞけなかったのではっきりと言明はできぬが、急峻でしかも落石やブロック雪崩の多い危険なルートではないだろうか。それよりもジュトマル氷河西侯から6,850m峰の北東のコルへ上がり、6,850m峰を北から捲いて東稜に取り付くルートはどうだろう。アッパー・ヤズギル氷河からも東稜へ取り付けないこともないが、このルートは長すぎるのが欠点だ。

C.6,850mの無名峰も高度差2,000m以上のすばらしい南壁を持っている。マイナー・ピークとはいえ、いずれこの岩壁を目指すパーティも現われよう。

クンヤン・チッシュ主峰 7852m ,  
東峰C.7400m ,西峰C.7350m

筆者がヌク・ラから眺めたこの山の最初の印象はとにかくばかどかい山だと思った。登攀ルートを探す心の余裕などまったくなく、その大きさにただただ感嘆していつまでも見上げていたものだ。南面や西面の高度差は約4,000m、しかも頂上は複数で東西にそして南北に頂稜が伸びている。急峻な岩と雪の壁に取り囲まれたその様はまるで中世ヨーロッパの巨大な要塞を連想させる。

主峰は1971年ポーランド隊により、プマリ・チッシュ氷河側の雪壁から南稜上部に抜ける信じがたいルートから登られた。筆者も同隊が登ったその雪壁を見上げたが、高度差約1,500mのうち右下の半分は雪がそげ落ち、上部もいつどこからでも雪崩が出そうでたった一つの命ではとても登

る気にはなれない壁だと思った。南稜は長大すぎて下部から登るパーティはもういないかも知れぬ。それより1980年に英国隊がねらったルート(悪天候で失敗したが)が面白そうだ。クンヤン氷河から主峰と北峰の科尔付近に伸びる小さな雪稜をつたって主稜線に抜け、雪の北稜をたどるルートだ。雪崩の危険も比較的少なく、技術的にも割とやさしそうだ。小人数によるアルパイン・スタイルの登攀にも使えるだろう。他に起バリエーションだがプマリ・チッシュ氷河側から主峰の東肩に上る岩稜と、南峰へ上がる岩稜(上部は雪稜)が目につく。両方とも急峻でしかも高度差は2,500~3,000mもあり、いずれこの山の一番の課題になる。

東峰(C.7,400m)も難しそうな山だ。最初に

考えられるのは東南稜だろう。この稜のプマリ・チッシュ氷河側は岩ばかりだが、ジュトマル氷河側は雪を付けている。取り付けは氷河の荒れ具合から考えればジュトマル氷河からが有利だろう。他にアッパー・ヤズギル氷河のクレバスをさけながら雪の北西稜に取り付くルートも可能なようだ。

西峰(C.7,350m)これも難峰だ。南面の氷河は途中岩壁で分断され、しかもその岩壁の上には危険なハンギング・グレンジャーが顔をのぞかせている。西稜は長くそして6,000m以上ではやせた岩稜が続き手ごわそう。北稜(稜と呼べないほど小さなもの)は下部に岩場があるものゝあととは急な雪のルートだ。このルートは技術的な面よりいかに雪崩をさけるかが大きな問題となる。

(つづく)

## 1982年パキスタン方面の登山許可状況

パーティ	第一希望で申請した山	許可された山
1. 静岡登山クラブ	ガッシュブルムIV峰	7,980m 同左
2. 東京朝霧山岳会	ボイオハグールI峰	7,329 同左(別名ウルタルI峰)
3. 諏訪山岳会	ウルタルII峰	7,388 パスー・ピーク 7,284m
4. 鵬翔山岳会	K7	6,934
5. 東京都庁山岳部	リンクサール	7,041 同左→ネパールへ転進
6. 金沢大学	ハチンダール・チッシュ	7,163 同左
7. 山岳同人まほろば	ユクシン・ガルダン C.7,530	同左(ただしパキスタン山岳会との合同が条件)→中止
8. 華奈婆同衆	ユクシン・ガルダン C.7,530	同左(同上)→合同条件を交渉中。合同不成立のときはクンヤン・チッシュ主峰
9. 華奈婆同衆	ドフィンギー	5,941 同左
10. 水沢山岳会	シャカウル	7,084 サラグラール 7,349m

### —事務局から—

#### ※ 事務局態勢の変更

機関紙編集を担当していた角田不二理事が仕事の都合上昨年末で専従を離れることになったため1月より尾形好雄氏が新たに専従しています。これによって事務局専従は2名となりました。この他常時3~4名の会員の方が勤務終了後事務局や各委員会のサポートとして活躍しています。

#### ※ 昭和57年度(57.4.1~58.3.31)会費納入お願い

年会費は前納制度となっております。本号に会費納入用の郵便振替用紙を同封しましたので6月までに納入下さるようお願い致します。尚、前区分未納の方は併わせて納入下さい。

#### ※ ナンダ・カートカンパのお願い

ナンダ・カートカンパにつきましても、既にお願しいし約150名の会員から御協力いただきました。今後共、積極的にカンパに御協力お願い致します。



## キングドン・ウオード (3)

水野 勉

荷物運搬の人数不足に加えて、その地方の住民はほとんど半餓死状態にあり、しかも一生の大部分を通じてそうであった。どこにいても、食料の余裕などなく、何週間もの旅行でも食料を買うことは不可能だった。そのため、多人数でこのような土地を歩き廻ることはほとんど不可能であった。この地方を遠征する場合には、食べる頭数が少なければ少ないほど、行動しやすいし、それだけ成果がみのりあるものになるだろう。

1913年にはウオードはその大部分をふたたびメコンおよびサルウィン川流域の探検ですごした。揚子江・メコン、メコン・サルウィン、サルウィン・イラワジの各分水界を構成する三つの平行山脈では、最高峰は横に並んでいることをかれは発見した。揚子江・メコンにはベイ・マ・シャン山塊、メコン・サルウィンにはカ・グル・ブ山塊、サルウィン・イラワジにはゴンバ・ラとそれぞれ横に向い合って存在する。

この年の旅行を扱った著書The Mystery Rivers of Tibetの中で、ウオードは特にカ・グル・ブあるいはカ・カルポと呼ばれる山塊について書いている。ジャクナゲやサクラソウがどこから採集されたかに興味を持つ人はたくさんいるだろうが、その地名が分水界上の主山脈、しかも氷雪に光るピラミッド状の峰々であることを知る人は少ない。つまり、ウオードはそのような高峰の中でジャクナゲやサクラソウ採集していたのである。ウオードが植物採集者というばかりでなく、山岳地帯の地理学的探検家としてみられるゆえんである。

やがてウオードはメコン川を渡り、ベイ・マ・シャンを探索し、それからアトンツェに戻った。それから北西に向い、南東チベットへと入り、サ

ルウィン川の支流、ユ・チュ沿いのピトゥを訪れた。

ウオードはタロン川すなわちマイファ川上流に達しようとして最善をつくしたが、このときはできなかった。ふたたびピトゥに着いたが、今度はチベットと中国の間に重大なトラブルが起きていた。ツァーロンのチベット人たちはウオードに非常に紳士的であったが、その土地に滞在することにはあくまでも反対した。それでしょうがなく、かれは南へと向い、アトンツェへと戻った。

1914年にはウオードはビルマにまた戻ってきた。今度は自分の仕事をビルマ北部と中国との間にある国境山脈に限定した。かれは基地をピマウに置いた。5年後にはファーラーもまたここに基地を置いた。ウオードの最大の目標はイマウ・ブムを登ることだった。このピークはどちらかと言えば独立峰で、国境主山脈に属しているのではなく、それに向い合ってそびえている。標高は13,370フィートである。興味ある植物が豊富な以外に、珍獣ターキンがたくさん住む生息地帯であった。ターキンというのは、アッサム北部、ビルマ北部、チベット南部山地に住むヤギに似たカモシカ類である。

それから、かれは国境山脈に沿ったルートで北上した。この旅行の間、かれはウララという峠を越えねばならなかった。そこに達するのにかなり苦勞したし、気候も非常に悪かった。ウオードは次のように書いている——「冬にはこれらの山々は深い雪におおわれ、冬期の数か月は寒さがきびしいにちがいない。わたしは雲南においてさえウラウ以上に花のためにすばらしい土地を見たことがない。また、それ以上に接近の困難なところも

なかったし、困難に勇敢に立向かう人びとにとっても、非常な苦しみを味わわずに近づくことができないうところだった。そのため植物採集者たちも思うようにいかず、その場所に豊富にある花々や動物が保護されてきた。それも長い間にわたってである。白人が1シーズンそこに住みつくことなどとても不可能のように思う」

そこから、かれはラキン川を下ってマイ・ファ川へと行った。そしてその川沿いに北上し、シングルブ・チェト経由で、マイ・ファとマリ・ファ両河川との間の山脈を越え、フォルト・ヘルツへ着いた。おそろしい気候にすっかり打ちのめされて病人のようであった。

1919年にはウォードはふたたびイマウ・ブムに向った。今度はそこばかりでなく、その付近をも徹底的に探査した。その夏であったが、かれはファーラーおよびコックスとピマウで一緒に数日をすごした。

1921年には、かれはふたたび、自分のよく知っている雲南を訪れた。麗江、ユンニン、揚子江を渡った地方、ムリおよび四川の一部などを歩いた後戻った。1922年には、ユンニン、ムリ、麗江などの旅行がくり返された。しかし、それから北西へ向い、カリ峠を越え、アトンツェを訪れ、北方へと向いツァーロンへと入り、ピトゥおよびダミョンの遠くまで足をのばし、その後ツェクまで戻り、ふたたびタロン川に達し、できるならばフォルト・ヘルツまで行き、マリ・ファ経由でミキーナへ下ろうとした。これは前には失敗したルートであった。

今度は成功した。サルウィン・タロンの分水界はピマウおよびチミリ付近のはるか南のサルウィン・マイファ分水嶺よりもずっとこのごぎり歯状にギザギザの荒れた山塊であった。ウォードはそれについて書いている——「タロン分水嶺の尾根はひどくギザギザ状に切り刻まれていて、空の透明なブルーを背景にして浮き出ている。その北端には山脈の最高峰ゴンバ・ラが王者のように巨大な山容でそびえており、モレーンと岩層との荒涼たるふんいきの中に白雪をきらめかせていた」

ツェクからのウォードのルートは、ゴンバ・ラの突出部を越えてタロン川へと下って、それから

別の山脈タル・トラを越えて、ナム・タマイ川に出て、ジャングルの中をとおってフォルト・ヘルツへとたどった。フォルト・ヘルツへ着く前の数日間というものは、ひどい熱病にやられて、まるで夢遊病者のようであった。このため、自分の計画した旅行の後半部分を実行することができなかった。すなわち、フォルト・ヘルツからアッサムへ抜けようとしたのだった。しかし、病気の男にしては、かれのなしとげた旅行は十分すぎるほどりっぱなものであった。

1924年にはキングドン・ウォードの名を地理学的に有名にしたツァンボ・ゴルジュの探検がおこなわれた。すでに北極その他に旅行した経験のあるアル・コウダーとともに1924年3月にダーズリンに着き、そこで第三次エヴェレスト遠征隊を率いたブルースと会い、輸送や従者などのことであれこれと親切なはからいを受けた。ガントクではベィリーの家に滞在し(2日間)、ツァンボの探検についての助言を受けた。ベィリーはすでに1913年モーズヘッドとともに、アッサムからミシュミ・ヒルをとおって、ツァンボ・ゴルジュまで先駆的な旅行を試みていた。この地域については最初の探検者といってよく、それ以来だれもツァンボ・ゴルジュを探ったものはいなかった。また、ギャンツェには、J・E・コーベット、F・ラッドロウなどがいた。ヒマラヤン・ジャーナルの初期の号をお読みになった方は、この2人の名前を知っているにちがいない。コーベットはヒマラヤン・クラブの創立者の1人で、H・J第1巻の序文を書いている人である。ラッドロウについてはすでにこの「閑話」でも何年か前に書いているから、熱心な方はおぼえておられるだろう。1933年から1949年にかけて、アッサム、ブータン、南東チベットを旅行しているが、そのうち、1938年にはツァンボの大屈曲点の北部の探検で、ナムチャ・バルワ、ギャラ・ベリなどの近くを訪れている。つまり、キングドン・ウォードはこの旅行にあたって先輩のベィリーおよび後につづくラッドロウの2人と会って意見の交換をしているのである。ツァンボ・ゴルジュの探検は、この3人によって、1913年、1924年、1938年と3回しか未だおこなわれていないのである。

# カラコルム登山報告

## —北海道大学山岳部山の会—

70年代前半頃までヒマラヤ遠征を志す者にとって報告書はある意味でバイブルであった。何よりもヒマラヤ全域に関して情報は現在に比して圧倒的に貧しいものであった。現在はどうかであろうか。毎年ヒマラヤに出る日本隊をすべて把握することはよほど注意していないとできないほど多い。

また、報告書をはじめ雑誌、単行本、会報類まで含めたヒマラヤに関する資料はおびただしく流れ、それらを整理し検索をつくり管理しようとする努力をあきらめさせるほどの量である。

情報は、管理され検索のシステムが整えられてはじめて体系化される。総合化と普遍化がなされるには体系化が必要であり、総合化と普遍化の中から組立てと創造、真実が導き出される。このような処理をされない情報は断片であり、独断と偏見であるかも知れず、行動のベースとした場合はある危険を抱え込むことになる。

特に、その時々々の先端の流れや方法が伝えられるときこの現象は常に起っている。最近の事例はいわゆる“アルパイン・スタイル”にみられる。本質が正しく理解されないために起る混乱は軽々な追従を呼び、高所登山では死に直結する。

現代においては、かつての地域事情のような単純情報ではなく、はるかにトータルな、むしろ登山の方法論のような広義の解析された情報がより重要になっている。それは登山ジャーナリズムに与えられるものではなく登山者サイドにおいて作り出すべきものである。内外の先端的ニュース、文献上での経験はもちろん、活字化されていない経験まで意図的に収集され、管理されるシステムが必要で、個人の力を越えている。高所登山の正しい発展をはるか上でのベーシックな面をフォローするこの仕事は大変な努力を要し地味であるが価値ある仕事である。当然最新の機器材の力を借りる必要があるが、H A Jなどはこれにふさわしい性格と機能を持っているのではなからうか。

さて、関連して我々がある隊の報告書に求めるものはできるだけくわしい事実記録とともに行動

の自己評価、それも普遍性を指標とした総括である。最近手にしたこの「カラコルム登山報告」は北大という場から出されたレポートであるだけに種々示唆されることがあった。一般に大学山岳部は社会人山岳会に比して恵まれたベースを持っている。そして、恵まれているが故に発展のエネルギーがひよわになっていることも否定できない。豊かな土壌が真の意味で生かされている大学は少ない。「あまりにも共有の認識が成されてしまう部分が多いために重要な認識のギャップに気付かずに流されてしまうような陥穿が、大学山岳部の隊には宿命的に存在している。したがって大学山岳部の隊の目指すものは、非対立、融和の隊ではなく、対立点を明確にでき、かつそれを越える本来の融和点が生かされる隊ということになる。…われわれ全員は、今、いくつかの激昂した論議の場を余裕を持って振返ることができる」北大はその一つであろう。実際行動にどう表現されたであろうか。高度順化のパターンを見ると、登頂までの12日間連続C2以上に滞在し、結果として全員登頂をかちとっている。けれど、帰路キャラバンにおいて40分歩いては30分休みというような異常な衰退が記録されている。全員登頂の成果の陰に明らかな危険が内在されていたことを物語っている。医師でもある隊長はこの事実をどう次期遠征に生かすであろうか。「天候周期と体力の予備力との兼ね合い」で下に下りなかったと担当は記しているが、これは「C1におりたら次の行動に有利であった」というような単純な問題ではないだろう。全員登頂とは肩組み合って頂上に立つことではないし、軽々に掲げることのできない目標である。北大という経験の累積と真近に冬の8,000mをめざすという常に新たな目標を掲げてやまない伝統の故に種々解析してみたくなるレポートである。(S)

B5判、125頁、1981年7月25日発行  
北海道大学山岳部山の会

# 新 入 会 員

昭和56年9月26日～57年2月5日

会員番号	氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
1540	佐藤尚志			
1541	長谷川啓明			
1542	大屋明義			
1543	佐藤誠			
1544	宮崎久夫			
1545	鈴木茂			
1546	工藤誠志			
1547	宮崎勉			
1548	糸屋幸			
1549	成尾竹俊			
1550	舟山邦芳			
1551	長本進			
1552	藤原武重			
1553	早田佳津子			
1554	清水義彦			
1555	下井孝雄			
1556	西川義弘			
1557	松永義夫			
1558	成田洋			
1559	吉越文隆			
1560	佐藤隆司			
1561	石井年光			
1562	小川貞夫			
1563	丸谷政明			
1564	渡俊二			
1565	内田利朗			
1566	伊東節郎			
1567	袖崎敏昭			
1568	太田行雄			
1569	戸谷薫			
1570	橋本康弘			
1571	平田清志			
1572	栗田喜代美			
1573	江本嘉伸			
1574	大久保博			
1575	田中吉春			
1576	渡辺照人			
1577	尾関敏彦			
1578	青山博			

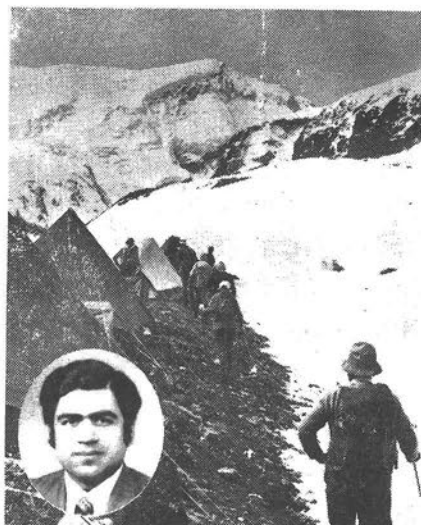


# Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

## “魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン  
クル・マナリ・ラダック・ネパール……  
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！  
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、  
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR  
(MANAGING DIRECTOR)



Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

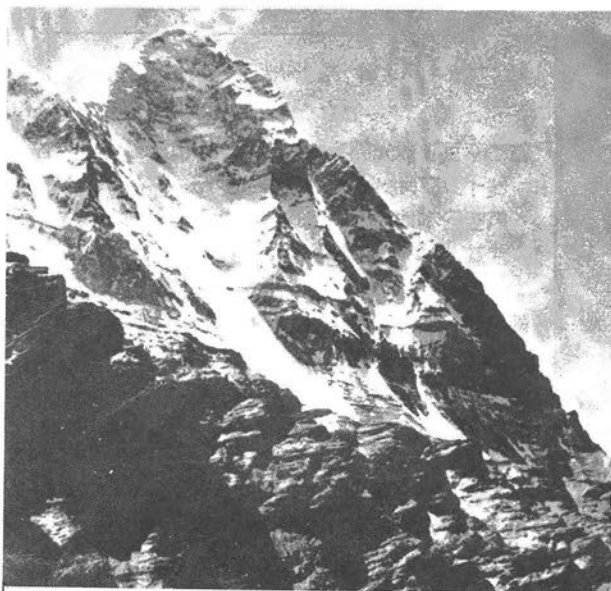
1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



ヒマラヤ登山の専門家

# SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India

Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表

ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル

☎407-8100 (代表)

## ■ 寸 感 ■

前号編集のピンチヒッターからどう云う訳か機関紙編集の仕事がまわってきました。

“物も云えなくなった者も居る”と云う殺し文句にまいり引き受けました。

素人の小生には手に余る業務かと思いますが角田前編集長や関編集委員らの協力を得ながら兎に角、より良い機関紙作りに頑張りますので宜しくお願いします。

(尾形)

## 事 務 局 日 誌 (2月)

- 4日(木) '82年クン登山学校集会
- 8日(月) 機関紙委員会(山森、角田、関、尾形)
- 9日(火) ブリグティ打合わせ(稲田、山森、菊地)
- 13日(土) 第1回カンチ会(福島・飯坂温泉・17名参加)
- 14日(日) 藤倉家葬儀(於:福島、山倉、稲田、菊地、尾形、他)

齊藤家葬儀(於:塩釜、西郡、小島、山森、伊東、八嶋)

21日(日) 札幌ヒマラヤ会議(山森、尾形)

本田家葬儀(於:長岡、稲田、小島、館野)

24日(水) ナルシン・M・S・プラダハン氏歓迎会(於:東京)

25日(木) '82年クン登山学校インストラクター会議(土居、稲垣、角田、尾形)

27日(土) '82年クン登山学校第二回合宿(於:HAJルーム)

## ヒマラヤ No.125 (4月号)

昭和57年3月10日印刷 57年4月1日発行

発行人 柴田 金之助

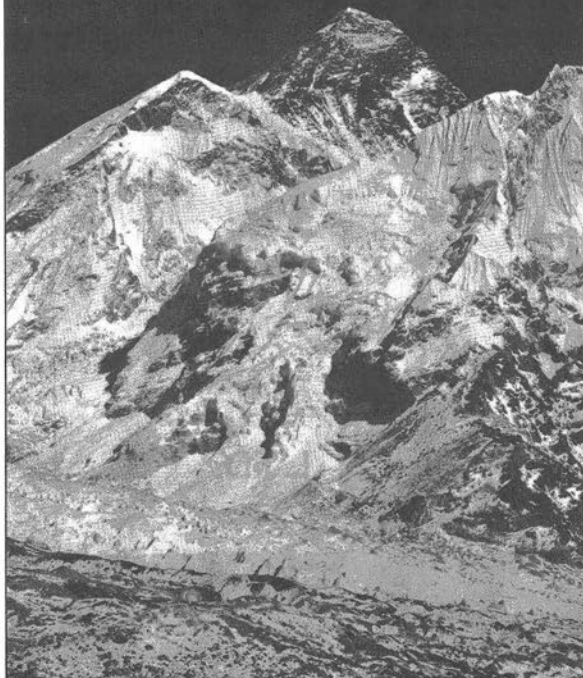
編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル 506号

1

ネパールへの旅は経験豊かな  
代理店を選ぶことが第一です



■ヒマラヤ観光開発(株)はネパール政府観光局  
指定インフォメーションセンター、ネパール  
航空日本地区販売代理店に指定されてお  
ります。

■ネパールへの個人旅行/トレッキング/パ  
ッケージ・ツアー/トレッキングで登れる  
18峰/登山の計画等、あらゆるご相談に経  
験豊富なスタッフがおりますので、安心し  
ておまかせください。

■ネパール国内ではトランス・ヒマラヤン・  
ツアー社/ホテル・エベレスト・ビュー/  
日本航空総代理店の業務を行なっており  
ます。

ヒマラヤ観光開発株式会社

〒105 東京都港区新橋3丁目26番3号 会計ビル 5F  
電話 03 (574) 9292~4

# カラコルムセミナートレッキング隊員募集

H A Jではこれまでネパールヒマラヤで五百沢智也講師のもとにセミナートレッキングを実施してきましたが、このたび「この催しをパキスタンでも!!」という要望に応え、下記のような計画を組みました。

コーランの読経と炎熱の砂漠、コパニーの実るオアシスの憩い、そして豪快なカラコルムの氷河をあなたも歩いてみませんか。

## 実施要項

**目的** 西部カラコルムバツラ山域の踏査及び五百沢智也氏の指導による野外調査活動

**時期** 1982年7月26日～8月15日

**負担金** 43万円(航空運賃の変動等により変わることもあります)

**定員** 20名(申込順)

**講師** 五百沢智也、他1名

**申込み** 1982年4月末日までに下記に申込むこと(資料を送ります)

〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

## 踏査コースと日程

7/26(月) 東京  $\xrightarrow{PIA}$  イスラマバード

7/27(火) イスラマバード滞在(山行準備)

7/28(水) イスラマバード  $\xrightarrow{バス}$  ギルギット

7/29(木) ギルギット  $\xrightarrow{ジープ}$  パール

7/30(金) パール→ボラダス谷→シュエー

7/31(土) シュエー→バルタール氷河→バルタールのカルカにB・C設置

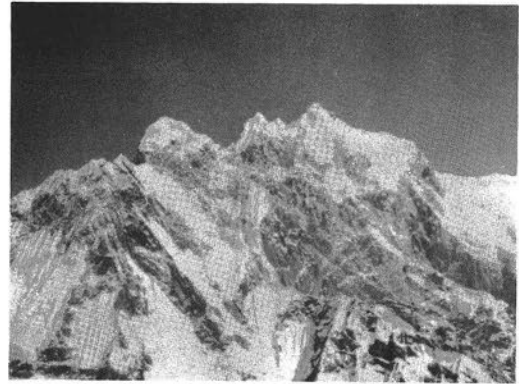
8/1(日) B・Cにて休養

8/2(月) バルタール→H A J '78 バツラB・C

8/3(火) H A J '78 B・C→バルタール

8/4(水) バルタール休養

8/5(木) バルタール→パール



▲バルタール氷河左岸の山々

8/6(金) パール  $\xrightarrow{ジープ}$  チャルト  $\xrightarrow{ジープ}$  ファンザ

8/7(土) ファンザ滞在

8/8(日) ファンザ  $\xrightarrow{バス}$  ギルギット

8/9(月) ギルギット滞在

8/10(火) ギルギット滞在

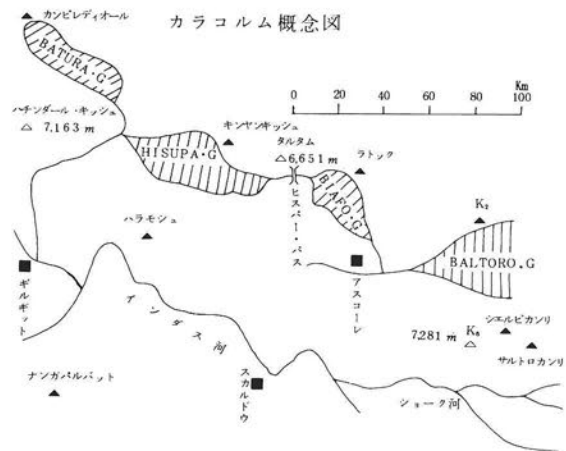
8/11(水) ギルギット～イスラマバード

8/12(木) イスラマバード(ラワルピンディ) 滞在

8/13(金) イスラマバード(ラワルピンディ) 滞在

8/14(土) 予備日

8/15(日) イスラマバード  $\xrightarrow{PIA}$  成田



# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



## ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219